

文献紹介

UNISIST・レファレンス・マニュアル†

永田 治 樹*

† Reference manual for machine-readable bibliographic descriptions / prepared by the UNISIST/ICSU-AB Working Group on Bibliographic Descriptions with the assistance of ICSU and ICSU-AB member services ; compiled by M. D. Martin. — Paris : Unesco, 1974. — 71 p. ; 30 cm
UN series no. : SC.74/WS/20

昨秋、この文献紹介を依頼されながら、転勤を理由に原稿を送らず、編集にたずさわるかたがたに大変迷惑をかけてしまっていたが、ちょうどその頃『情報管理』の「ことばの泉」¹⁾欄にこのマニュアルの概要が掲載された。その欄の筆者内田尚子氏は、このマニュアルをコンパクトにまとめて、「情報センタ、抄録索引サービスおよび図書館の技術管理およびシステム設計スタッフが、同じレファレンスマニュアル方式を採用している他のセンタと互いにファイルと交換できるような方法で、システムを設計するのに役立つ仕様書ともいべきものであり、初心者教科書とか、図書館のカタログングマニュアルの類とは全く違ったものである」と紹介している。これだけでこのマニュアルの抄録といえそうだし、私もこれがとりわけてシステムの書で

あると同意するが、今一度、若干偏った姿勢でもって紹介してみよう。というのも、従来より営々として資料を扱ってきた図書館のような機関にあるものにとって、システムという言葉はそれほど明晰ではないし、必ずしも合法的なものでもない。そんな想いを抱きながらのブリーフィングである。

ところで MARC は、コンピューターの図書館への浸透を決定的にしたものであろう。いわく、コンピューターは「情報の洪水」に対処しうるものであるとか、われわれの業務を代替したり、省力化する道具である。そんなイメージを具体化したものとして MARC が現われたのであり、それがとくに図書館の日常の基本的な業務を対象としていたから、その影響とそれへの待望は大きかったわけである。しかしながら、現在までこの国では MARC の効

*ながた はるき 国文学研究資料館

1) 情報管理 Vol. 18 No. 7 Oct. 1975 p. 617.

用はそれ本来のあり方に比して、さほど大きくない。理由はいくらもつけられよう、たとえば LC・MARC のテープを導入しても、多くの図書館の取書に対するカバーレージが低いとか、有効な活用の手だてがないといったことなどと、とにかく、従来の図書館に適合しなかったようである。一方それとは別に、東洋の繁栄する国では、コンピューターが図書館にもちこまれ、非書誌的業務での実用がすすめられた。ブルドーザーのごとき総括をすれば、これがこれまでの図書館へのコンピューター導入のあり方ではなかったろうか。むろん、この間の努力は評価されねばならないし、かなり高いレベルのものも出現したことも確かであるが。

このあたりで、コンピューター技術を活かした業務の姿を、上に指摘したような跛行的進展を反省した上でみいだすべきである。つまり、なぜ書誌的な作業がうまくいかずに、そうではないものが成功したかという問いに答えなくてはならない。ひとつにはシステムの規模という問題でもあるが、ありていにいってしまえば、やはり総体的なシステムの観点が欠落していたり、あったとしてもコンピューター技術にふりまわされたものであったろうと思われる。ときには、システムに触れないという暗黙の了解の上でコンピューター化が実行されてしまったかもしれない。それだから、MARC については、「遠吠え」が盛んになり、その「音

色」の評価争いとなったし、他方の非書誌的業務はコンピューター・オリエンティッドな「システム」で稼働したのである。システムはコンピューターによって創られるというより、変えられるのであり、その変更は現行のシステムの影響を受ける。つまりコンピューター導入は必ずや異ったシステムへの移行を促すのである。そしてさらに、もしも旧来のシステムが把握されており、新しいコンピューター・ベースのそれもみえているならば、問題は両者の接続の具合、インターフェイスの持ち様にある。

だが、問題提起をすればそれですむわけではなく、現実の課題に対処していかねばならない。ところで、われわれはもともと最先端に立ってはいない。過去の遺産を継げばいいのである。この事実はこれまでもある程度まで同じ状況だったのだが、問題はその相続の仕方ではなかろうか。たとえばわれわれのもつ遺産は第一にこの書のようなマニュアルである。そして今視点を変えてみよう。マニュアルはわれわれの労働過程（手作業）を示すと同時に、コンピューターやシステムへのインターフェイスの手引きであると、つまり全体的な視座でシステムの書と理解するのである。私はこのような着眼を、ネットワークにおける互換性の問題を考え比較マニュアル論を試みてみようとしたとき、やっと思いついた。愚かにもシステムの問題をとらえる手段を

見すごしていたよう
だ。そこで、ひとつ
MARC・ マニユ
アルについてもいかにイ
ンプットしていくかの
説明書とみるので
はなく、それによっ
て MARC のシステ
ムを、理解し検討せ
ねばならないという
のが、現状への視点
の転換であると同
時に、このマニユアル

(表 1)

文献 タイプ	Analytic	Monographic	Collective
Serial	✓	✓	
Book	✓	✓	✓
Report	✓	✓	
Thesis		✓	
Patent	✓*	✓	

* if taken from a comprehensive announcement in an official gazette

への対応の仕方とならないだろうか。

外側よりのこのような指摘を、このマニユアルは内容的にも反映している。すなわち、これは表面的な「仕様書」の意義をこえているのであって、その総体的な構成は注目すべきものである。それを次に具体的に示しておこう。

第 1 部：書誌レコードのフォーマットと内容。文献タイプと書誌レヴェルのとらえ方、各文献タイプごとに必須のデータ要素の集合の全般的な定義。

第 2 部：個々のデータ要素の詳細な定義と、必要に応じて、データ要素の内容の選定および収録方法の手引き。

第 3 部：レコード・フォーマット、文字コード等、主にコンピューター・システム設計者向けの事柄の詳細な説明。

第 4 部：このマニユアルに記述された条項によって、各文献タイプごとに作成した完全な書誌記述の例。

四部構成による全体の中で、とくに第一部に概念的に示された書誌制御のあり方、つまり (表 1) にみられるような書誌収録を、このシステムは実行する。「二次情報サービスで通常ひき合いに出される各種の学術文献について、引用の書誌表示として適切な書誌要素を決定する」というスコープが、このような領域を包含し、それらの制御指針を定めたのであるが、これほどの広がりをとらえているシステム (マニユアル) は他にないし、また広がりを求めるばあいによくあるサブ・システム相互の不均衡さをまぬがれている点もこのマニユアルの確かさである。

さて、一度はこのマニユアルの成り立ちに目を転じてみなくてはならない。「UNISIST/ICSU-AB の書誌記述作業部会によって整えられたこのレファレンス・マニユアルは、UNISIST と ICSU-UNESCO の世界的な学術情報

ネットワークの可能性の検討プロジェクトのもとに4年間にわたる国際的協同作業の結果」と述べられているように、これは国際的な次元で考案された。作業部会のメンバーをみても ISO, FID, IFLA, IATUL, INIS, OECD などの専門家から成っている。そしてこの作業部会が先に示した目標をめざして、具体的には1)抄録や索引サーヴィス、2)サーヴィス相互間の情報交換の促進、3)より容易にコンピューター・ベースの情報を提供しうるために、まず必要最小限のデータを定義し、それに補足的データを指示したのである。この間、第一次草案が1972年の初めにでき、その後 University of Sheffield, Postgraduate School of Librarianship and Information Science でテストをおこない、討論が重ねられたうえで1974年に発表されるという経緯であった。また、内田氏によると今後の保守のために、UNISIST Information Centre on Bibliographic Descriptions が創設されようとしているそうである。

このマニュアルは、しかしながら、厳格な標準をめざしたものではない。レファレンス・マニュアルと名づけられているとおり、ひとつの勧告であり、エッセンシャル・ミニマムを中心に情報交換をすとしても、各システムごとに機能上必要なものを選べばいいのであり、この点はフォーマットについ

てもそうである。レコード・フォーマットは ISO 2709²⁾ という標準のひとつの実行例ではあるが、これへ変換可能ならばどんなフォーマットを使ってもいいのである。そこに現われた意図は、このマニュアルがシステム設計上の諸問題について示唆するものなのである。

ところで、書誌要素におけるエッセンシャル・データという概念が現われているが、少しそれにこだわってみよう。いわゆるエッセンシャル・ミニマムということは、書誌作業にたずさわっているものにとって自明すぎるほど自明であるはずなのだが、実はこのマニュアルにそれをみるときある新しさを感じるのである。というのもたとえば制限日録法における書誌要素はひとつのエッセンシャル・ミニマムではあるが、そのばあい多くは作業量上の問題が先だったりして混乱している。また別には、各館でのエッセンシャル・ミニマムの相違がその図書館なりの反映として考えられるばあいもある。前者ではなく後者のようなレベルでまず根本的にエッセンシャル・ミニマムを考えられねばならないのであろうし、これを明確にすることは実際上の必要である。つまり先に私は比較マニュアル論といったが、情報を相互に交換し合う上で、マニュアルを比較検討しておくという意味あいと、それによ

2) ISO 2709-1973: Documentation-format for bibliographic information interchange on magnetic tape.

ってどのマニュアルにも組み込まれているものをエッセンシャル・ミニマムの一例とみなすという実務上の意図があったのである。これを把握しておかないと、いくら高い見地でシステムを立てようと、実行上においてシステム設計は困難であろう。UNISIST・レファレンス・マニュアルがこの点からいってもすぐれて現実的なものである。MARC・マニュアルのある意味でのむずかしさもこのあたりにあるのかもしれない。

第2図はこのマニュアルのエッセンシャル・ミニマムである。上に述べたエッセンシャル・ミニマムのシステム上の意味合いはともかく、それら自身書誌要素として適当であるかどうかはより基本的である。すなわち書誌要素の把握の仕方に焦点をあてておかねばならない。ごく最近、私は同じくUNISIST から出された“Format incompatibility and the exchange of bibliographic information”³⁾ というレポートを入手したが、これは再々引きあいに出している比較マニュアルの文献である。少々横道にそれるが、このレポートは、UNISTST・レファレンス・マニュアル、LC・MARC、BNB・MARC、Canadian・MARC、MONO-

CLE, EUDISED, INTER-MARC, MAB1 との八つのシステムを比較し“Universal exchange format”をめざしているものである。そして、この研究の結論によると、ほとんどあるいはすべてのフォーマットにおいて本質的なデータは共通であったが、より詳しい考察をすると、それぞれのユニークな要素定義が相当多くみられたという。いわゆる互換性の問題がコンピューターや物理的なフォーマット定義のあり方にはもはやなく、データの把握のあり方こそ重大であるということである。(表2)をそのような意味で検討していくべきであろう。(最近科学技術庁振興局で出した『書誌的情報の記述に関する基準(案)』⁴⁾というのは、このマニュアルを下敷にしているのだろう、これについても合せて検討したい。)

それにしても、このマニュアルは先のリポートが〈文献タイプ対書誌レヴェル〉というマトリックスの構成によるその手法を高く評価し、MARCフォーマットよりはるかに実行上のフレキシビリティをもつものと評価しているように、非常に有益なシステムを提示している書である。

3) Format incompatibility and the exchange of bibliographic information : a comparative study / prepared by John S. Mackenzie-Owen. — Paris : Unesco, 1976. — 60 p. ; 30 cm

UN series no. : SC.76/WS/1

4) 書誌的情報の記述に関する基準(案) : 参照文献の書誌記述 / 科学技術情報流通技術基準検討委員会。— [東京] : 科学技術庁振興局, [1975]。— 40p. ; 26 cm